DOI 10.18995/24344710.11.254

翻訳

Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』(翻訳・その２５)

堀　啓子

これまで『東海大学紀要　文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要　文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(*Dora Thorne*)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載二十五回目となるこのたびは、第三十章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続いてDodo Pressの二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

＊本稿は、科学研究費補助金【基盤研究（C）】[課題番号：２１Ｋ００２９０]による研究成果の一部である。

三十章

舞踏会がどのように終わったのか、ベアトリスはほとんど覚えていなかった。彼女は幸せの余り、ずっとぼんやりしていた。音楽や人のささやき声は聞こえるのだが、すべて夢の中のようだった。何もかもがいつもよりずっと輝いて見えた――それはエアリー卿が彼女の側に立っているからだった。彼女の心は、筆舌に尽くしがたい喜びに満ちていた。

奇妙なことに、その幸福な時間、彼女はヒュー・ファーナリーのことを、すっかり忘れていた。彼の記憶は、彼女に脳裏をよぎりもしなかった。彼女の幸せを邪魔するものは何もなかった。

彼女は、来客たちが次々に別れの挨拶に来るアール卿の側に立っていた。彼女の父を待っているエアリー卿の姿が、その目に入った。

「アール卿はしばらく手がふさがっていらっしゃるようですね」と彼は言った。「私は今夜、お父上とお話ししなくてはなりません。ベアトリス、お父上が我々に許しを与えてくださるまでお休みにならないと約束してください。」

彼女は抗えなかった。ベアトリス・アールのような娘が、ひとた

び恋に落ちると、明らかに自分の意思を失ってしまうのだ。彼女は喜んで、冗談まじりに、彼は一晩には十分すぎるほどの告白を彼女から勝ち得ているはず、と告げた。そしてそのまま、自分は彼が望むとおりにする、と約束した。

アール卿は、客たちと別れの挨拶を交わしている間、エアリー卿がなぜ自分の近くにいて、自分を見失わないようにしているのか、いぶかしんでいた。最後の客の馬車が去って一息つくと、アールズコート家の人々だけになった。アール卿夫人は二人の娘たちに、半時間ほど自分の部屋に来て、この舞踏会の模様を話してほしいと言っていた。ライオネルは、この夜が終わったことを惜しみながら自分の部屋に引き上げた。そしてヒューベルト・エアリーはアール卿のもとに行き、十分ほど話をする時間をいただきたいと頼んだ。

「明日ではいけませんか？」と、ロナルドは時計を持ち上げて微笑みながら尋ねた。「ごらんなさい、もう三時をまわっています。」

「いいえ。」と、エアリー卿は答えた。「中途半端な状態で一晩を過ごすことはできません。」

「それではいらっしゃい。」と、アールズコートの主は言って、まだ灯りが点されている書斎へと伴った。

「さて、お話はなんでしょう？」と、興奮した必死な面持ちの、恋する男性を振り向くと、彼は気さくに尋ねた。

「おそらく私はもっと言葉を選ぶべきなのでしょうが」と、エアリー卿は言った。「出来ませんでした。アール卿、私はあなたのお嬢様のベアトリスを愛しています。彼女を私にくださいませんでしょうか？」

「他のどのような方へよりも、喜んで」と、ロナルドは答えた。「娘は同意していますか？」

「そうだと思います。」と、エアリー卿は答え、彼女の言葉を思い出した。その心は幸福に踊っていた。

「では」と応じて、アール卿はベルを鳴らすと娘を呼びにやった。

エアリー卿は、ベアトリスが彼から半ば顔を背けながら部屋に入ってきた時の、美しく紅潮した表情を決して忘れることはなかった。

「ベアトリス」と、彼女の父親は、彼女の両手を握りしめながら言った。「この話は本当なのかい？私は、エアリー卿にあなたを差し上げるべきなのだろうか？」

「もし、お父様が喜んで下さるならば」と、彼女は小さな声で答えた。

「もちろん、喜んでいるよ」と彼は叫んだ。「ヒューベルト、私

のかけがえのない宝を差し上げましょう。あなたは娘自身の言葉からその愛情を知りうるでしょう。娘があなた以外の誰かを愛したことはありません。あなたが私の娘の初恋であり、最初の恋人です。娘が他の誰をも愛したことがないことに満足されて、あなたは娘を温かく受け入れてくださるでしょう。そうだろう、ベアトリス？」

「ええ」と、彼女は一瞬、言葉に詰まってから答えた。初めて、彼女はヒューを思い出した。

「明日」と、アール卿は続けた。「今後のことを話し合いましょう。今夜は、我々皆、疲れています。エアリー卿、これでゆっくりお休みになれますね？」

「とても眠れそうにありません。」と彼は応じた。

「では、もし私に選べる権利があったとするならば、娘のベアトリスを委ねる相手として誰よりもあなたを選んだであろうことを理解しておいてください。」と、アール卿は言った。「礼には及びません。恋する男性がどれほど感謝の言葉を費やされるものか、私には想像もできませんのでね。おやすみなさい。」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「どうしたの、ベアトリス？」と、小ぎれいな小さな衣装部屋で二人になった時、リリアンが尋ねた。

「簡単な言葉では言い表せないわ。」と彼女は答えた。「エアリー卿が求婚してくださったの――彼の妻になってくださいって。ああ、リリー、私も彼をとても愛しているの。」

誇りも威厳もすべてが剥がれ落ちていた。その美しい顔をリリアンの肩に伏せて、ベアトリスは幸せの涙にくれた。

「私は彼をとても愛しているの、リリー。」と彼女は続けた。「でも、彼が私に好意を持ってくださるとは思ってもみなかったわ。こんなに幸せになれるなんて、私は一体何をしてきたのかしら？」

かつてこのきれいな若い姉妹たちの姿ほど美しい光景を、月光が照らしたことはなかった。リリアンは清らかな上品な顔をベアトリスの方に伏せた。

「私は彼を、彼自身を愛しているの、リリー。」と彼女は続けた。「彼は、すべての男性の王様よ。あれほど勇敢で寛容で高貴な方がいらっしゃるかしら？あの方がたとえ物乞いでも、私は今と同じように愛さずにはいられないわ。」

リリアンは、彼女の美しい濃い色の瞳に疲れが滲んでくるまで、うなずきながらじっと耳を傾けていた。そしておやすみなさいを言うと、自身の部屋に引き上げた。

ベアトリス・アールは、ついに一人になった――そして幸せと愛情を噛み締めた。その心と気持ちが静かに落ち着くことは二度とないように思われた。眠ろうとしたが無駄だった。エアリー卿の表情や声、言葉の数々がずっと忘れられなかった。

彼女は起き上がり、きれいなピンク色のガウンを羽織った。新鮮な空気が眠りに導いてくれるように思われたので、彼女は大きな窓を静かに開けて外を見渡した。

夜はまだ深く、空気は澄んでいた。月が暗い木々の上に傾いていた。銀の光が、遠くの湖や眠り込んでいる花々や緑の芝生を一面に覆っていた。木々の枝が優しく揺れ、風のなかで葉のさらさらと鳴る音が響いた。空は美しく静かであった。星の光がまたたく空の荘厳な美しさと星々の静かなつぶやきが彼女に訴えかけてきた。

誇り高い、情熱的な心に、ある優しく高貴な感情がよぎった。ああ、これほど輝くすばらしい未来において、自分は善い行いをしよう、誠実で強い意志を持ち、リリーがその時に愛したり話したりすることに対して、もっと真剣に向き合おう。そう考えた後、彼女はまた、恋人と、薔薇の庭での幸せな時間へと思いを馳せた。窓からは、月が一面に照らしているその庭が見えた。その月の光は、輝くように美しく陰りのない彼女の人生の美しさそのものだった。こんな考えが、彼女の心の浮かんでいる間に、木々にある影がさした。彼女は目をやり、小さな庭の低木の間を横切って、歩く長身の男性の姿を認めた。彼はしばらくそこに佇み、この館の窓を長い間熱心に眺め、大きな庭園の方へと姿を消した。

彼女は驚かなかった。一瞬、誰だろうかという思いはよぎった。おそらく猟場番人か庭師の一人であろう。しかし彼女はほとんど気にも留めなかった。月明かりの中の一つの影が彼女を脅かす事はなかった。

冷たい新鮮な空気は、効果てきめんだった。美しい濃い色の瞳には本当に疲れが滲み、ついにベアトリスは眠りについた。

目覚めた時、太陽は明るく輝いていた。彼女の傍には、まだ朝露が輝いている、香しい花束が置かれていた。そこには、こんな言葉が添えられていた。

「ベアトリス、朝食の前にほんの少しの間、庭に降りていらっしゃいませんか？そして昨夜の出来事がすべて夢ではなかったと私に告げてください。」

彼女はすぐに、起き上がった。そしてきれいな朝のドレスの上に軽いショールをまとうと、エアリー卿に会うために降りていった。

「夢ではありませんわ。」と言いながら、彼に向けて彼女は両手を差し伸べた。

「ああ、ベアトリス、あなたは何とお優しいことか！」と、エア

リー卿は応じて、元気にこう続けた。「朝食のベルが鳴るまでに二十分ありますね。最高の時間にしましょう。」

この朝は爽やかで美しく静かで、木々のまわりはぼんやりと霞んでいた。

「ベアトリス」と、エアリー卿は言った。「三週間前の私は、あなたを私のものにできるよりは、あの太陽が落ちてくることの方がよほど安易なことだと思っていました。最も崇高な、私の理想の女性が実在するとはほとんど信じられなかったのです。私の他に誰も愛したことがない若い女性と結婚することを私はずっと望んでいました。あなたはそうでしょう。私が今あなたの手をとっているように、誰もあなたの手をとったことはないでしょう。私が昨夜、あなたの顔にキスをしたように、あなたに口づけした男はいないでしょう。」

彼が話している間、彼女の顔は赤らんだ。彼女は、ヒュー・ファーナリーのことを思い出した。彼は彼女が顔を赤らめたことで、彼女がなんと純粋であどけないことかと思い、よりいとおしく感じた。

「私は、自分がとても嫉妬深い恋人になるのではないかと心配しているのです。」と、彼は続けた。「あなたの美しい瞳に映るすべてのものに私は嫉妬するでしょう。午前中に遠乗りしませんか？あなたもご存知の私の館――リントンについてお話ししたいのです。あなたはリントンのレディー・エアリーになり、どんな王様の立場よりも私はそのことを誇らしく思うでしょう。」

ついに朝食のベルが鳴り響いた。ベアトリスが食堂に入ると、レディー・アールが立ち上がって近づいてきた。

「あなたのお父様が知らせて下さいましたよ。」と彼女は言った。「神のご加護がありますように、そして可愛いあなたが幸せになりますように！」

ライオネル・ダッカーは事情を察したが、特に何も言わなかった。話題は主に昨夜の舞踏会のことに終始したが、アール卿はしばしば、郵便物が、今朝はなぜこんなに遅くまで届かないのか気にしていた。

郵便物は朝食が終わるまで届かなかった。アール卿は、郵便物をそれぞれに配った。三通がエアリー卿宛で、ドラからアール卿夫人へ一通、二通がライオネル宛で、リリアンには何もなかった。アール卿は大きな青い、何の変哲もない封筒を一通、手にした。

「ミス・ベアトリス・アール」と彼は読んだ。「ブルックフィールドから。何と大きな文字なのだ！この名前の宛先に間違いなく届くように。」

ベアトリスは、その手紙を何気なく受け取った。筆跡に全く見覚えはなかった。ブルックフィールドに知り合いはいなかったが、最寄りの郵便の取り扱い所があるため――チラシか何か、慈善事業へ

の依頼のようなものだろうと彼女は思った。エアリー卿が、部屋を横切って彼女に話しかけに来たので、彼女は何気なくドレスのポケットにその手紙を入れ、数分のうちに全てを忘れてしまった。

エアリー卿が待っており、乗馬用の馬は早くから準備されていた。ベアトリスは、急いで部屋に駆け上がり、乗馬用の支度を整えたため、この手紙のことは考えもしなかった。

それは楽しい乗馬になった。何日も経ってから、人生で最も楽しい時間だったと、彼女は振り返ることになった。エアリー卿はリントンのすべてを、彼の美しい館――壮大な由緒ある古城で、どの部屋にも言い伝えがあり、すべての木々にも歴史が伝わるその館について語った。

彼はすばらしい仕事に着手するつもりだった。それは、館に新しく壮大な棟を増築することで、その中の一部屋は、技巧と贅を尽くした美術品で埋め尽くすつもりであった。

「この棟の女主人の私室は」と、彼は続けた。「女王や妖精にふさわしいものにするつもりです。」

こうして彼らは楽しく、晴れやかな光の中を乗馬していた。突然、ベアトリスはあることに思い至った。

「どうしましょう」と彼女は言った。「母はどう思うでしょう？母に会っていただかねばなりません、ヒューベルト。母は、愛情や結婚に対して強い嫌悪感を抱いているのです。気の毒なお母様！」

彼女は、自分にとってこれほど嬉しいものである愛が、母にどんなことをもたらし、あれほどの嫌悪感を抱くように仕向けてしまったのか、不思議に思った。エアリー卿は、彼女の人生設計と望みのすべてに、温かい気遣いを見せた。ドラが同居に同意するならば、彼の美しい妻のために用意される大きなスイートルームの隣に、ドラの部屋を用意するつもりであることにも彼はふれた。

「ほんの一言」と、エアリー卿は提案した。「私に我慢して下さるように、と言葉を添えることをあなたはお許しくださるでしょう。」

「お安い御用ですわ。」と、この連れの女性は笑いながら言った。

彼らは長い間、乗馬していた。戻ってくると、ベアトリスは少し疲れており、すぐに自分の部屋に向かった。彼女は、エアリー卿について述べる自分の言葉に、母が微笑んでくれるに違いないと思い、ドラ宛の長い手紙を綴った。彼は、誠実で高貴で騎士道精神を体現した偉大な男性で、この世に他にそんな男性はいないのだ、と彼女は書き綴った。手紙を書き終えた頃には、夕食のために着替える時間になっていた。

「何をお召しになりますか、お嬢様？」と、いつもの気の利くメイドが尋ねた。

「一番美しい衣装を」そう答えたこの若い娘の美しい顔は、彼女がたった今、書き終えた言葉のために輝いていた。

どんなドレスならば彼にふさわしいほど美しいのだろう？ついに見つけた一着が彼女を喜ばせた。――それは、たっぷりとした白いクレープ生地のドレスだった。だが、彼女は敢えて宝石を身に付けず――ただ深紅の薔薇を飾ることにした。一輪は彼女の濃く豊かな巻髪に、もう一輪は首もとに、他の花は流れるようなスカートの上にループ状に飾った。

ベアトリスは、自分の身じまいに満足し――その身支度は好みのうるさい彼女の恋人をも喜ばせるはずだった。彼女は大きな姿見の前に立ち、喜びのために満面の笑みを浮かべた自身の表情を鏡の中に見出した。

突如、彼女はあの手紙のことを思い出した。件の朝のドレスはまだ椅子の背にかけられていた。彼女はポケットから手紙を取り出した。

「ほかに何かご用はございますか、ベアトリスお嬢様？」とメイドが尋ねた。

「いいえ」と、封を開けながら、ベアトリスは答えた。「もう支度は終わったわ。」

若いメイドは部屋を後にした。そして姿見の前に立ったまま、ベアトリスは厳封された封筒を開封して長い手紙を取り出すと、差出人は誰かといぶかしみ、驚きつつ署名に目を落とした。

（以下、次号）

翻　訳

Charlotte M. Brame 著『ドラ・ソーン（*Dora Thorne*）』（翻訳・その２５）

堀　啓子

A Translation of *Dora Thorne* by Charlotte M. Brame　㉕

HORI, Keiko